



みどりの風

平成30年 1月号 在籍児童数485名

学校教育目標

- 自ら考えのびる子
- 思いやりのある子
- 進んで体をきたえる子

子どもへの言葉 ～母から学んだ「ヘイワ」～

校長 吉野 高男

新年明けましておめでとうございます。

保護者の皆様、地域の皆様には、清々しい新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。また、旧年中は本校教育活動にご理解・ご協力を頂き感謝申し上げます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

さて、新年にあたり、子ども達も気持ちを新たに今年の抱負や目標を考えたところかと思えます。ご家庭においてもお子様を中心に今年の抱負などで話題が盛り上がったことでしょうか。そのような折、大人が子どもにかけられる言葉は、想像以上に子どものその後の人生に影響することがあるようです。大人にとっては日常に過ぎない1コマが、子どもには大きな意味を持つ場面であったり、言葉になったりします。

昨年、年の瀬に行われたノーベル賞授賞式の報道から、私はその思いに至りました。ノーベル文学賞を受賞した長崎出身の英国人作家カズオ・イシグロ氏が、スピーチの中で日本に生活していた幼少期の記憶に触れていました。スピーチはもちろん英語ですが、時折日本語が散りばめられ日本人としても不思議な感覚のするスピーチでした。イシグロ氏はノーベル賞への思いを5歳の時の記憶から思い起こしていました。当時、長崎に生活していたカズオ少年は、タタミに寝転びながら聞いた母の言葉に特別な感情を感じたそうです。ノーベルショウ（賞）がヘイワ（平和）を促進するためのものであり、幼いカズオ少年はヘイワが大切で、それがなければ自分の世界が恐ろしいものに侵されてしまうものだと言葉から知ったと語っていました。

その後、人生のほとんどをイギリスで生活したイシグロ氏は、幼い時の日本の風景や記憶を情感豊かに独自の世界観をもって小説に描いています。このように考えると、幼少期の環境や受けた言葉などが無意識のうちにその人の生き方に大きく関わるのだと改めて考えさせられました。私たち大人にとっては、何気ない日常であっても、もしかするとその1コマ1コマが子どものその後の人生を大きく変えることがあることを忘れてはならないし、その子の成長に責任をもって関わらなければならないと感じました。

3学期も「互いに 聴き合い 支え合い 学び合う」学級・学校を目指して全教職員一丸となつて取り組んでまいります。皆様方には引き続きご理解・ご協力の程、お願い申し上げます。